

# 日本の介護業界で働く外国人労働者に関する意識調査： 留学経験がある中国人と台湾人を対象に

著者	廣橋 雅子
雑誌名	佐久大学信州短期大学部紀要
巻	28
ページ	21-26
発行年	2016-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1050/00000203/">http://id.nii.ac.jp/1050/00000203/</a>

研究ノート

# 日本の介護業界で働く外国人労働者に関する意識調査 —留学経験がある中国人と台湾人を対象に—

廣橋雅子 (佐久大学信州短期大学部)

The attitude survey for international workers at long term care industry in Japan  
—The subjects to Chinese and Taiwanese with experience of studying abroad—

Masako Hirohashi (Department of Shinshu Junior College at Saku University)

**Abstract:**2000年より介護保険法が施行され、2008年に国内の介護の担い手不足解消のため、東南アジアとの経済連携協定(EPA)による外国人ケアワーカーを導入した。しかし、EPAで渡日し3年勉強しても合格率がとても低く、日本語の習得が大きな障害となっていたことで、2016年、日本は国に関わらず留学し介護福祉士資格を取得後、就労できるように動き始めている。近年、多くの中国人や台湾人留学生が介護を学びに渡日している。しかし、介護の資格を取得しても介護現場で働けないことを承知の上で留学を決意している理由として、インタビューの結果将来的に母国で役に立つということ、日本の介護を勉強することを大学の先生に勧められたことが分かった。また、苦勞した点では日本人との人間関係を築くことの難しさ、生活費維持のためのアルバイト先でのコミュニケーションに戸惑ったことも明らかになる。

**キーワード:** 介護留学、中国、台湾、経済連携協定(EPA)、外国人労働者

## I. はじめに

近年日本が提唱する「地域包括支援」や「地域に根づく介護」や「その人らしい生活」などの福祉マインドに基づく介護倫理や概念と技術は介護における人材育成の基盤として欠かせないものである。国が介護の重要さを謳っている一方で、度重なる社会的不評やメディアでの風評圧力を受け、介護市場における人材確保に苦戦している。

2008年、経済連携協定(以下、EPAという)による外国人介護福祉士養成プログラムを導入時、対象国は非漢字圏国家であった。漢字文化の無い国の人に、3年の滞在中に日本語をマスターすることを要求し、文化や作法、礼儀、生活習慣も身につけることを要求したことに筆者は疑問に思った。

筆者は2009年から中国や台湾のように日本と同じ漢字文化を持つ人材の受け入れを提唱し続けている。同じ東洋思想をもち、衣食住文化に重なりのある中国や台湾、特に台湾は日本の50年間の統治時代を経験していることから、生活文化が近いのである。これらの背景を持ち、なお漢字文化を共有していることから、日本語学習は非

漢字圏国家の人より容易であることも理由のひとつである。

そこで、現在介護市場で働く「中国語」を母語とする留学経験者を対象に調査を行った。介護福祉士の資格を取得しても、「介護」就労ビザが取得できない日本で、彼らがどのようなきっかけで介護研修や介護の勉強を決意したのか、そしてどのような思いで現在働いているのかを調べることにした。

## 1. 台湾の介護事情

### 1) 介護政策について

医療技術の進歩により、平均寿命が年々上がり2014年の台湾主計処(台湾における統計局に相当する)の統計資料によると、男性76.7歳、女性83.2歳となり、2016年の台湾の高齢化率は12.9%(2016年7月末1)である。2018年には高齢化率が14%を超え、2026年には超高齢化社会の20%を超えると予測される。

台湾は20年ほど前から住み込みの介外国人労働者を受け入れ、自宅の高齢者の面倒を嫁の替りに面倒を見させている。多くはフィリピン、インドネシア、ベトナムから台湾に来ているが、近年各国も高齢化問題が深刻化し、台湾への人材輸出減少傾向が懸念されるようになって

た。

外国人労働者を頼らなくても介護サービスが受けられることを宣伝するために、2007年日本のゴールドプランを真似た「長期照顧 1.0」（長い期間面倒を見るという意味から長期照顧といわれる。日本の介護に相当する）政策が施行された。台湾衛生福利部（日本の厚生労働省に相当する）の「長照顧人包 2.0」の資料によれば、特徴的な施策として在宅サービスと施設入所の社会的資源を活用できるよう拠点を増やした。しかし、この介護サービスの恩恵を受けている割合は 25.6% だけだ。理由として、三つ挙げられている。(1) サービス対象者の条件が 4 つしかないため、条件にあてはまらなければ対象外となる、(2) 受けるサービスごとに条件があるため、一度に複数サービス補助金支給が受けられない、(3) 介護を担う人材が足りない、である。

長期照顧 1.0 は、10 年間の期限が定められている政策のため、2015 年には新たな長期照顧服務法が国会で可決され、これが、長期照顧 1.0 の終了と同時に 2017 年に施行する予定の「長期照顧 2.0」である。

台湾で働く外国人介護従事者数は、2016 年 6 月末の時点で 228,011 人、そのうち 5,613 人は施設で働いている。数値から推測すると施設以外の在宅などで働く人数は台湾全土で 20 万人を超えている計算となる。しかしながら、これらの外国人介護従事者は雇用主が世帯ごとであり、そのうえ専門的な教育訓練を受けていないため、中には家事手伝いとして働き、家事の合間に高齢者に付き添っているだけという状況が見られる。

このように台湾当局は介護の専門性の欠如及び介護人材不足の現状に悩まされ、新たな長期照顧 2.0 を打ち出すことで期待がされ、その中でも国内人材の育成や外国人介護従事者への教育が検討されているようだ。

## 2) 介護人材の育成

台湾では、介護の資格を取得する方法が二つある。一つは、国家試験の「照顧服務員技術士技能検定」に合格すること、二つ目は、行政院が認可をしている訓練施設などが定期的に行っている「照顧服務員訓練課程」の 90 時間のプログラム（50 時間講座 + 40 時間実技）を受け、修了時試験に合格することである。合格すると行政院勞工委員会職業訓練局が発行するラインセンスがもらえる。

受験資格は、中学校を卒業した 16 歳以上 55 歳以下の人であるため、多くは中高年の女性や社会的弱者と呼ばれる失業者などが多く、質の高い介護を要求するには教育側の更なるチャレンジが必要になる。このように社会

的弱者が多く働く一方で、シルバー産業の将来に期待し多くの大学が「介護学科、福祉学科」を立ち上げ、すでに台湾では 27 校ほどの大学・大学院に介護に関連する学科が存在する。しかし、よほど看護師のような国家ライセンスを所有している人でなければ、卒業しても 90 時間の介護プログラム修了者と同じとみなされ、大学を卒業しても就職が厳しく介護での保障のある進路が確保されていない。

## 2. 中国の介護事情

中国の人口が成長を続けている中で、2014 年末総人口数は 13 億 6,782 万人であり、15—64 歳の労働力人口は 9 億 9,070 万人である。一方 65 歳以上の高齢者人口は 1 億 3,755 万人となり高齢化率は 10.1% となった（金、2016）。

1979 年中国は「一人っ子政策」の実施によって、子供に老後の面倒を見てもらうことが困難となった。そのため、老老生活・独居老人を意味する「空巢老人」が 2013 年には高齢者全体のうち 50% を超えた。国土が広い中国では、都市と農村、都市と都市、農村と農村の間は経済や文化だけでなく産業・社会構造が異なるため、高齢化速度にも相違がある（周、2015）。周が指摘するような社会的背景も現在の中国の介護事情に地域差が見られる大きな原因である。

多くの研究資料から、中国の介護において介護に関する「定義」の統一見解がされていないため、数値や用語、しいては含まれる意味範囲に互いの相違が見られることを清水は指摘する。また、2016 年 6 月に筆者が上海の医療系大学と病院へ視察した際に、看護学部の教授たちとの会議でも、「ケアワーカー」の資格に対する認識がそれぞれ異り、介護は看護の一部分であるとの認識や、介護は家政婦と同じであると蔑んだ見方をする方がいた。そのため、基礎認識の部分での意見交流に多くの時間を割かれた記憶がある。とはいえ、このような超高齢化社会に突入しようとしている状況の中で、中国でも介護を担う人材の育成は重要な政策になると会議では様々な意見が出た。

中国では「養老護理員」という国家資格が 2002 年から設置されている。清水の研究によると、中国の幾つかの大学で介護に関する専門学科を準備し、その中でも独立学科として三種類に分類した。一つは、医療福祉系学科、二つ目は経営管理系学科、最後に高齢者サービスと管理系学科を同時にもつ大学があることがわかった。このように 2005 年から中国も全国的に介護に関する学科

設置をするが、介護学としての学問的な統一ができていないため、いまだ定着していないことがわかる（清水、2015）。

## II. 留学経験者の声

「おもてなしの心」を大事にする日本では、介護に対する質の高さもアジア諸国から認められ、特に中国・台湾の有識者が近年日本の介護現場の視察に日本を訪れている。このことから、中国や台湾も高齢化社会にどのように政策を打ち出すべきか、人材を育てるべきかで悩んでいる。

社会保障制度のもとで行われている介護サービスは低賃金が常に問題視され、日本でも台湾でも人材確保に苦戦している。

それでも、日本の介護を学びたいと日本で生活している若者がいるのはなぜなのか。調査をした2016年秋の時点では、日本の介護福祉士国家資格を取得しても、就労ビザは認められなかった。その留学動機と目的を明らかにするため以下の調査を行った。

### 1. 調査内容

本研究の初期段階として5名の日本留学経験あるいは日本で介護の研修経験者を対象とした。一人約1時間のインタビューを行いそれぞれの背景や思いをまとめる。インタビューの内容を大きく3つの方向にわけた。①現在の仕事に就くまで、介護に興味を持ったきっかけ②留学や研修で苦労した点、③どのくらい日本に滞在する予定か、である。

### 2. 調査方法

#### 1) インタビュー方法

いくつかの介護施設で現在も働き、以前日本へ留学をした経験がある中国人や台湾人に対し調査内容とその目的を事前に電話で説明し、協力に同意してもらった。その後、メールでインタビュー内容を送付し、都合の良い時間の調整をしたうえで、スカイプ、LINE、wechatなどのインターネット環境を利用したインタビューを実施する。

#### 2) 調査期間

2016年9月5日～9月13日

#### 3) 倫理的配慮

事前に調査目的と調査内容を伝え、個人名や職場などの名称を公表しないことを伝え、偽りの無い想いを述べ

てもらい、インタビューを受けることに同意をしてもらった。なお、同意を得た時点で内容の公表も同意したものとした。

### 4) インタビュー対象者構成

表1 インタビュー対象者リスト

対象者	A	B	C	D	E
年齢	26	27	25	28	27
性別	女	男	男	女	女
出身	台湾	中国	台湾	中国	中国
職種	医療機器メーカー	日本介護施設	台湾訪問介護会社	日本介護サービス会社	日本介護サービス会社
最高学歴	大学・台湾	大学・中国	大学・台湾	大学院・日本	大学・日本
専門	日本語	日本語	日本語	同上	同上
最終学歴	専門学校	専門学校	同上	同上	同上
資格	日本介護福祉士	なし	台湾照服服務員	初任者研修	ヘルパー2級
日本語能力	N2	N2	N2	N1	N1

5名のうち、女性3名、男性2名。出身は中国3名、台湾2名、すべて30歳未満であり、最高学歴はすべて大学以上である。

現在日本で就職をしているのは、B、D、Eの3名で、AとCは母国で働いている。

以下ではインタビューの内容を3つの視点から分け、まとめたものである。より本人の気持ちを伝えるため、話口調で記述する。

### 3. インタビュー結果と内容

#### 1) 介護に興味を持ったきっかけについてと現職について

Aさん：

「母国で日本語学科を卒業後、第二専門領域とし、当時の大学教員から勧められ、日本の専門学校で介護を学びました。しかし、卒業時（2014年）日本で介護福祉士を取得しても就労ビザがもらえなかったため、帰国を決意。その後、母国で介護の仕事をしたのですが、職場環境が悪く、結局転職し日系の医療機器メーカーの社長秘書と通訳などの業務をこなしています。高齢者が好きなので、機会があったら資格を生かして日本の現場で働きたいです。」

Bさん：

「大学時代に日本の介護施設で奉仕活動研修を体験しました。そのときに日本の介護の素晴らしさを知り、卒業後日本で仕事をするため観光関係の専門学校へ入学し、その後ホテルで仕事をしていました。しかし、どうしても介護の仕事がしくて今の施設へ転職しました。施設では通訳業務や中国からの学生の世話などをしています。また学習と研修の目的で現場に入ることもあります。」

C さん：

「台湾の大学 3 年在学中、通訳授業で担当教授がこれからの高齢化社会に必要な介護人材の話をしたのが一つのきっかけで、二つ目のきっかけは、その当時祖母が転倒し自分が介護をしたのですが、何もわからず少しでも理解したくて日本研修に参加しました。短い 1 ヶ月でしたが、日本の文化や日本語の強化ができました。大学 4 年の時、更に介護の仕事が知りたくて、もう一度研修に参加しました。卒業後は兵役があったので、日本にはいきませんでした。その後台湾の会社で介護人材教育の仕事をし、現在は台湾の居宅サービスで訪問介護士をしています。」

D さん：

「大学 3 年までは、中国の大学で日本語と土木工学を同時専攻していました。そこで、日本の大学との交換留学プログラムがあり学校の先生が勧めたので日本語学習が嫌いだったのですが、現地に行けば日本語が上達するだろうと思います。思い切って日本へ行きました。日本では 2 年の福祉総合学科を学び 3 つの学位を取得しました。その後も、大学院へ進学し福祉の勉強をしました。当時は、これからの中国も介護が必要になると先生方に勧められて、福祉に進学しました。今は介護サービス事業会社で台湾からの研修学生の世話をしたり、会社の介護マニュアルの翻訳をしたりしています。これから中国へ進出するため、中国出張が増えると思います。」

E さん：

「大学 2 年までは日本語学科で勉強していました。留学の予定はなかったのですが、周りの友人が留学することもあるとあって、チャレンジしてみました。日本の大学では 2 年間経営を専攻しました。卒業後中国に帰ることも考えたのですが、たまたま学校で中国留学生向けの企業説明会があったので参加をしたら介護業界だったのです。「こんな会社もあるんだ～」と思ったのをまだ覚えています。私は高齢者が好きだったので入社を決めずに 4 年仕事をしています。最初の 2 年は介護の現場での研修がメインでした。その後は、海外からの視察研修などの翻訳通訳業務をこなしているのですが、一番好きなのは現場での仕事です。今は中国に施設建設をしているので、日本と中国を行き来しています。」

## 2) 留学や研修で苦勞した点について

A さん：

「大学卒業前に N2 を取得しました。留学時の日本語は

特に問題はありませんでしたが、専門の勉強が大変でした。生活費を稼ぐために毎日学校が紹介した病院でバイトをしました。バイト先の日本人とのコミュニケーションがととても大変でした。特に方言やカタカナ用語の理解に苦しみました。利用者さんへの対応が教科書通りにならないことも大変でしたが、簡単な日本語を使いながら周りの話す内容を学習し覚えました。

田舎だったので、交通の便が悪く学校からバイト先に行くのに、移動だけで毎日 2 時間は費やし、自宅に戻るのが夜の 8 時～9 時で、それから勉強をしていました。睡眠不足が一番辛かったです。でも、野菜をくれたり、お米を分けてくれたり、一番うれしかったのは充実した奨学金があったことです。それによって、学費はすべて免除になりました。ですので、将来介護士として恩返しをしたいと思っています。」

B さん：

「2013 年 10 点差で N1 に落ちました。大学時代に 1 ヶ月の日本介護奉仕活動に参加したのがきっかけです。そこで、日本の介護施設の素晴らしさも学んだのですが、日本国民の質の高さ、美しい自然環境、食品衛生の安全性、交通網の発達には特に印象に残っています。中国の大学を卒業したら必ずもう一度日本に行くことに決めていました。

日本のサービス業にとっても関心をもっていたので、大学卒業後、日本の専門学校に編入し、サービス業について勉強しました。それは、今でも介護において役に立っています。

日本での生活はととても大変でした。物価が高いので、バイトもして毎日 12 時頃に帰宅しそれから宿題をしていました。交通費を節約するため、自転車で通学していました。片道 40 分かかりましたが、楽しかったです。

一番苦勞したのは、その後の職場でした。サービス業なので、言葉の壁をととても高く感じました。文化の相違から、先輩から「中国の癖を持ち込むな！」と言われたこともありました。しかし、何が間違えているのか理解できませんでした。職場の人数も少なく、早番から遅番まで働かされていた時期もありました。心身ともにストレスを一番感じた時期でした。」

C さん：

「日本介護研修を 3 度経験しています。日本の介護施設で一番困ったことはコミュニケーションでした。特に、利用者さんとの意思疎通は大きな戸惑いを感じました。」

また、私は大学の通訳授業として研修に参加しましたが、通訳という役目もこなさなければいけませんでした。そのときに初めて自分の言語能力の足りなさを感じたのです。1回目と2回目は介護施設での研修だったので、専門用語の学習で意思疎通はできたのですが、3回目は就職先の会社が開催した介護研修プログラムでアシスタントとしての通訳業務でした。これは本当に難しかったです。多くが日本の制度や認知症など、専門的な内容が多く困った記憶があります。」

Dさん：

「日本に来たばかりのころ、N1は持っていましたが、本当に伝えたいことを表現できませんでした。授業は全部録音し、自宅に戻ってからそれをノートにまとめ、翌日先生への質問項目も作るという毎日でした。毎日5時間くらい復習していたと思います。学校の寮が高かったので、自分で住むところを探しました。

日本の大学の先生が会話練習に学生を紹介してくれました。彼女は週1回の約束でしたが、毎日のように声をかけてくれてサークル活動にも誘ってくれて、本当に良く付き合ってくれました。おかげで日本語が上達しました。いまでは大切な友達です。」

Eさん：

「私は将来的に通訳の仕事がしたくて日本語の学習を目的に留学を決めました。日本に来てからN1を取得したのですが、一番困ったことは文章を書くことでした。特に卒業論文は大変でした。それから、日本人の友達ができなかったことも困りました。中国の大学と留学先の大学は提携を結んでいて、20名ほど日本へ留学ができたのです。そのためか、授業もそれ以外の時間も中国人同士で集まる傾向がありました。でも、居酒屋のバイトをしていたとき、たまたまママが中国人だったので生活面ではたくさん面倒を見てくれました。」

### 3) この先、どのくらい日本に滞在する予定か

Aさん：

「来年の6月までは今の会社で仕事を続ける予定です。その後はまだ決めていませんが、台湾では30歳から35歳までは一つの仕事を2年くらい経験し転職する人が多いです。自分の可能性を見つけるという意味でのチャレンジだと思います。でも、やはり介護の第一線で働きたいとずっと思っています。」

Bさん：

「今の介護の仕事は続けます。まず、「人のために」という性格がこの仕事にあっていると思いました。それと、将来的に中国でも必ず必要になると思うので、まだまだ勉強したいです。少なくともあと3年くらいは滞在したいですね。そして、将来は指導者を目指してがんばります。」

Cさん：

「現在台湾で訪問介護士として働いているので、施設現場での仕事がしたいと思っています。理由は、訪問だと自宅から利用者さんの自宅の往復になり、職場の職員との連携がありません。もっと情報交換や自分の仕事についての客観的な評価がもらえません。自己反省もできません。また、日本で勉強したいと思っていたのですが、家庭の事情や親の収入を考えると決断ができません。いつか介護でマネージャーになるのが夢です。」

Dさん：

「私は将来的に日本に在住する予定です。婚約者も日本に来る予定です。親も賛成してくれています。やはり日本での生活のほうが安心で、子育てなど将来的なことを考えると日本にいたいです。

日本の介護を中国に広めたいですが、中国資本の施設で働くことは考えていません。中国で仕事をするのであれば、日本資本の施設で日本の介護を提供するために働くことは可能性がないとは言えません。」

Eさん：

「この仕事は続けたいです。将来自分で決められるのなら、ずっと日本にいたいです。ここの県が大好きです。景色がとてもきれいで、私は都会が嫌いなんです。でも、親が結婚できないと心配しているんです。結婚相手は中国人がいいのですが、なかなかここにいないんです。今の仕事をやめて中国に戻る予定はありませんが、今の仕事を生かせるなら中国に行ってもいいです。現在、日本の会社が中国で施設を建てているので、自分の思う介護が提供できるのなら、ぜひやってみたいですね。でも問題は、どんなに介護の仕事をして、私たちは経験として認めてもらえないので、介護福祉士の資格が取れないんです。それが一番の悩みです。」

### Ⅲ. 考察

#### 1. きっかけについて

A から E まで、すべてが母国の大学で教員に勧められて留学したこと、そして母国では日本語学科の学生であったことが特徴的であった。

その後、日本国内や母国の大学教員の勧めが介護や福祉・経営分野を勧めたことがその後の進路に大きな影響を与えていることが分かる。

また、介護関連に進路を決めた理由については、

- 1) 高齢者が好き
- 2) 誰かのために働きたい
- 3) 母国の介護環境に貢献したい

の三つが挙げられる。

#### 2. 日本で苦勞した点について

全員語学学習の難しさを語り始めた。第二言語習得では聞く、話す、読む、書く、訳すと 5 つの力を求められる中で、一番苦勞したのが「話す」能力である。日本語検定試験 1 級や 2 級を取得していても、コミュニケーション能力を習得するには環境と時間が必要であり、適切な表現や適切な情報を伝えることの難しさを全員が留学中に感じていた。

言語能力以外では、日本の物価の高さとバイトの収入のバランスを保つ苦勞や、震災時の避難などがあげられていた。

#### 3. 今後日本にどれほど滞在する予定があるか

A さんは現在母国にいるが、日本が外国人の介護福祉士資格を認めたら日本で働きたいという。C さんは、将来的には日本で介護を一から学びたいと思っている。

それ以外の 3 名 (B, D, E) に関しては、現在日本で介護関連の仕事をしている。3 人ともまだ母国に戻る予定は無く、少なくとも数年は日本に滞在し、日本の介護をより深く理解し、運営方法などを習得してから母国で将来役立てることを目標にしている。

全員が日本にいて日本で介護を学べると意見が一致している。そのため、将来的に来る予定をしている人もいれば、定住する予定もあれば、長期で滞在を計画する人もいた。

### Ⅳ. まとめ

中国語を母語とする介護学習者は、はっきりとした目的意識を持ち日本で学習をしていることが分かった。日本の介護現場で働ける就労ビザが無くても、何らかの関わりを持つことで個人の将来性を見出していることも確認ができた。

2017 年 4 月よりこのような資格取得外国人が介護就労ビザの取得が可能になったことで、より多くの漢字圏国家の学生が日本を訪れることになる予測されている。日本語の学習と同時に専門の介護の勉強や、生活面での学習など多くの学びの機会を提供できることを期待する。

これらの留学生が将来的には母国での教員となり、リーダーとなり高齢者社会を支えていくことを期待すると同時に、日本側は日本が培ってきた専門知識や技術をどのように諸外国へ伝え、どのように人材を受け入れ育てるかを考えなければならないだろう。

#### 【参考文献】

- 1) 行政院主計總處, 國情統計通報 (第 173 號)  
<http://www.stat.gov.tw/public/Data/69121632395LGQL25T.pdf>.
- 2) 中華民國統計資訊網, 全國統計資料「外籍勞工人數」  
<http://statdb.mol.gov.tw/html/mon/i0120020620.htm>.
- 3) 金光洙. 中国の高齡化の要因と經濟的影響. 現代社会文化研究. 2016, No.62, P181-196
- 4) 清水由賀, 中国における介護人材の育成に関する一考察. ソシオサイエンス. 2015, Vol.21, p62-76.
- 5) 周金蘭, 中国における高齡化の現状と高齡者対策. 現代社会文化研究. 2015, No.61, P135-189.
- 6) 長照懶人包 2.0, 台灣衛生福利部資料網  
<https://www.slideshare.net/ROC-MOH/20-64725338>, 2017/01/25.